

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第十二卷 「人文科学（一の二）」

東洋思想、 非西洋思想、 インド宗教、 東アジア宗教、 非西洋宗教および
東洋史、 非西洋史、 東洋および非西洋の地理

編纂、 監修 岩崎純一学術研究所 『岩崎純一全集』 編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第十二巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、東洋思想、非西洋思想、インド宗教、東アジア宗教、非西洋宗教および東洋史、非西洋史、東洋および非西洋の地理に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳〜十九歳

第二編 二十歳〜二十九歳

第一部 和辻哲郎

第二部 井筒俊彦

第三部（編集者）

東洋思想と現代日本社会と私

東洋哲学と現代日本社会と私

「東洋哲学」と「東洋思想」

夏目漱石の自我への違和感

井筒俊彦の言語アラヤ識

東洋哲学観察史

中国哲学

儒教

道教

中国仏教

三教併存

朱子学と陽明学

中華人民共和国と宗教

インド哲学

ヴェーダとバラモン教

ウパニシャッド

ブラフマンとアートマン

仏教の発祥

インド仏教

ヒンドゥー教

カースト

カーマ・シャーストラとインドの性犯罪

イスラム哲学

中東神秘主義哲学

東方イスラム哲学

西方イスラム哲学

超越論的神智学

イスラム原理主義とテロリズム

日本人のイスラム解釈

イスラム女性の権利

環太平洋地域の哲学

民族と語族の関係

シヤーマニズム、アニミズム、多神教

インディアン

エスキモー

アマゾン

ハワイ、ポリネシア

朝鮮民族

満州民族

日本周辺の太古思想

アイヌ、ニブフ、ウイльта

琉球、奄美

サンカ

大和民族の起源と大和朝廷

第三編 三十歳～三十九歳

井筒俊彦生誕百周年

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作者が岩崎純一であるもの

第九編 著作者が岩崎純一であるもの

第一編 ○歳〜十九歳

編纂中。収録を待たれよ。

第二編 二十歳〜二十九歳

第一部 和辻哲郎

二〇一一年六月十九日 起筆、擱筆、公開

■おすすめ著作

『風土 人間学的考察』 『古寺巡礼』 『倫理学』 『人格と人類性』 『日本精神史研究』 『日本古代文化』 『日本倫理思想史』 『ニイチェ研究』 『ゼエレン・キエルケゴオル』

特に共感覚を日本文化の原風景として再発見する私の身勝手な試みに、和辻哲郎の風土論がどれだけ力になったか知れない。

今の日本において、和辻哲郎の風土論がどこまで有効かは分からない。このような印象論としての風土論を、多くの一般の日本人や日本の学术界、日本政府は必要としないように思う。

しかし、和辻自身にとって『風土』が日本の空間の発見であったように、私にとっても『風土』が日本的な共感覚空間の発見の代弁

者であった。少なくとも私は『風土』をそのように読んだ。十七歳で初めて読んだニイチェやハイデガーの時間論に加えて、新たに空間論が、私の日本的共感覚論に付け加わったのであった。

むろん、和辻が人間の五感、さらに日本人の五感というものをどうとらえていたかは分からない。しかし、この日本列島において、モンスーン気候を最初に知覚するもの、地震・津波・台風を最初に目撃するものが、我々日本人の肉体に宿る五感であるということ、忘れるわけにはいかない。

けれども、五感の分裂が最初に進み、その裏返しとして共感覚者が最初に珍しがられて「発見」されたのが、ヨーロッパの牧場的風土においてであることは、我々の誰にも否定できない史実なのであった。和辻は、自然が人間に従順なヨーロッパの牧場的風土において自然征服の発想が生まれたのだとはつきり書いている。

私の考えでは、自然征服の発想にピタリと寄り添う形で、人間の話す言語の格機能が主格化するから、「ヨーロッパの牧場的風土とは、人類の系統発生・個体発生の両面で、早くから共感覚を必要とせず生存が可能である風土のことである」という和辻と私の仮説の折衷論を、恐れ多いながらも考えたことがある。

和辻の風土論を軍国主義・ファシズムの温床の一つと見るのは、大きな誤謬であると思う。実際は、船旅の中で再発見した日本人としての強い実存の、空間方向への優しい発露であると、私は思う。

第二部 井筒俊彦

二〇一一年六月二十日 起筆、攔筆、公開

■おすすめ著作

『意識と本質―精神的東洋を求めて』 『意味の深みへ―東洋哲学の水位』 『意識の形而上学―「大乘起信論」の哲学』

井筒俊彦の「言語アラヤ識」は、私が岩崎式日本語を構築する上で最もよく参照した思想の一つである。また例えば、鈴木大拙の「即非論」は、「言語アラヤ識」に最も近い「識」の形態か、あるいはそれと同等のものとして生じると、私は考える。

また、「井筒哲学における言語アラヤ識は今西錦司の言う人類のプロトアイデンティティ（原帰属性）であるか」という問いを私は考えたが、これに対しては、井筒も今西も言及したことがないと思われるいわば「真我の進化過程」について考えてみた結果、条件付きではあるが、「Yes.（原帰属性である。）」の回答を与えたくなるわけである。

第三部

編纂中。収録を待たれよ。

第三編

井筒俊彦生誕百周年

二〇一四年五月十五日 起筆、攔筆、公開



五月十一日に池袋のジュンク堂に行ったら、井筒俊彦生誕百周年記念フェアをやっていて、井筒俊彦の誕生日が今頃（五月四日）だということを思い出した。こういうときに「灯台下暗し」と言うのかどうかわからないが、普段読んでいるのに誕生日を思い出せない哲学者は結構いる。

しかも、どういう奇妙な運の巡り合わせか、十一日は、井筒俊彦の『意識と本質』を人に貸すために、夕方に家から持ち出す予定だ

ったので、余計に驚いた。日本語の歴史の変遷を知る上で読んでおいた方がよい本を求められたので、せっかくならと、自分の蔵書から、金田一京助の『日本語の変遷』などの日本語学関連の本や『古今集』などの和歌関連の本とともに、何冊か持ち出した哲学書のうちの一冊であった。最近の学者だと、新形信和の『日本人の（わたし）を求めて―比較文化論のすすめ』などが好きだが、こちらも貸し出した。

ジュンク堂の井筒俊彦の本のすぐ隣には、必定、大川周明の本も並べられていた。私の個人的な井筒哲学への入り方としては、禅・唯識・言語アラヤ識の側面が最初であったが、イスラム思想の側面からも、二十代に入って様々な宗教学書と並行して読み始めた。

「側面」と言っても、コインの裏表であることは間違いない。アメリカ同時多発テロが起きたのは十代の終わりだったが、その頃はニーチェやハイデガーを読んでいた時期だったので、宗教学をそこまですで真剣にやっていたわけではない。

それにしても、井筒の言語アラヤ識を理解するためには、唯識や華嚴、例えば、鎌田茂雄の『華嚴の思想』などを前もって読んでおくのも手かもしれない。というより、そういった別の仏教書や哲学書、言語学書を注釈書として設定するのがよい読み方だと思う。

ところで、チョムスキーの生成文法理論における普遍文法の東洋的実存版とも言える言語アラヤ識ではあると思うけれども、言語アラヤ識への「無意識の意識」は、そのままサピアが批判的に名づけたSAE (Standard Average European = 標準平均欧州言語) に基づ

く従来の優勢学的言語学からも超然とした、いわば涅槃的境地でもあるのだから、一度井筒哲学を自分の言語観に著しく引きつけて読んでしまった私のような人間には、どうしても生成文法理論への興味が自分の実存・生き方・人生や気持ち・感情とは切り離されたものになる。

チョムスキー階層における終端・非終端記号による生成規則のままでは、SAE はなお、まさに標準平均的なSAEであり続け、日本語を含む東洋言語や世界中の滅亡寸前の少数民族言語に対して世界標準平均的に君臨しようと思う。井筒の言語アラヤ識においてはそのような態度がほとんど消失しており、そこに真の深みがあると個人的には考えている。

そもそもSAEの優越に対する批判精神が言語アラヤ識そのものであるし、それをイスラム教圏・クルアーン・アラビア語にまで広げてとらえた井筒俊彦という男の心優しさに私は惹かれてきたわけで、その原点は今でも忘れたくないと考えている。

今現在の私は、こうして自分のサイトをHTMLで記述したり、先日のようにプログラミング言語のJavaScriptによる共感覚ゲームをサイトに載せたりしているけれども、今や自分の中ではチョムスキーの普遍文法への興味は、私の中ではそういう作業において参照するものになってしまっている。

すなわち、チョムスキーの言う（仮想する）「普遍文法」が、私の中で、「世界中の人々の心に当てはまる」ものどころか、むしろチュールリング完全なプログラミング言語・形式言語の学問的追究のため

の道具・ネタになってしまっているというのが実状である。

もしかしたらチョムスキーの思想もそういうものではないのかもしれないが、井筒俊彦や大川周明の思想を知った後では、なかなか後戻りすることが難しいのも事実である。

そこから、「プログラミング言語の文法は常にSAE的であり、SAEの文法は常にプログラミング言語的である。一方、クルアーンのみならず、そもそも旧約・新約聖書でさえ、普遍文法の文脈で読解することなど不可能であり、多分に言語アラヤ識において体得されるべきものである」という私自身の考えも出てきたのだ。

さて、そこで井筒哲学のイスラム教研究の側面だが、大川周明と同時並行して読むと、いかにイスラム教が、仏教及び仏教のシステムティックな側面が八百万の神々を「道」化して成立した神道と、西欧列強の帝国植民地主義に乗って侵入してきたキリスト教との間を取り持つ、東洋的かつ西洋的な宗教であるか、さらには昨今のテロリズムがいかに非イスラム教的であるか（預言者ムハンマドの大局観からそれているか）といったことが分かる気がするのである。

アメリカがイラク戦争を戦績の意味でも人道的な意味でも完全勝利に終えることができなかった遠因の一つには、戦績の意味では東京裁判という事後裁判の強行（国際法上、違法な手続き）、人道的な意味では原爆投下（非戦闘員・民衆の大量殺戮）という重大な借りを作っていながら、いざGHQの支配下に日本列島・天皇・国民を置いたところ、日本のほとんど誰もが反抗しようと思わず、そのままGHQ支配と不平等な安保条約、そして朝鮮・ヴェトナム戦争特需の

恩恵を受けて（それこそ日本国民の「識」における戦争肯定の大衆心理によつて）高度成長を遂げる日本のスタイルがあつさりと成立してしまったことがある、つまりは、同じことがイスラム教という宗教、中東の人民に対しても強行できると踏んだことがあることは間違いないと思う。

先日、ある保守系政治雑誌で、独立総合研究所の青山繁晴氏がイラク戦争直前に、アメリカに「一神教に対して日本支配と同じやり方をやろうとしたら絶対に間違う」と進言していたが、聞き入れられなかったことを知った。これは、俗っぽい雑誌の中で今の時代の文脈で言ったものだから、見過ごされがちだと思ったが、これには一理あるどころか、井筒俊彦や大川周明が生きていたなら最初に発した言葉かもしれないと思う。

大川周明が東條英機をひっばいた真の理由など知るよしもないが、それはともかく、今後もブッシュ前大統領やオバマ大統領がクルアーンを読んだり、井筒俊彦や大川周明を読むことはないだろうと思うのである。

はつきりしているのは、アメリカにとって戦争・占領統治をしかけるのが最も簡単だった（今なお簡単である）のは日本で、かなり難しかったのが中東だということではないだろうか。

ところで、少し個人的な興味から、最近では、井筒俊彦や種村季弘が入っていたエラノス会議がはじめに共感覚を研究してくれないかと期待しているが、もっと神秘的・トランスパーソナル心理学的な要素が必要らしく（神秘的と言っても、井筒の言うようなそれでは

なく、オカルト的な意味)、もはやほぼ新宗教系組織のようになっており、むしろ「科学的に立証済みの非日常的現象」にはあまり興味がないようである。

【画像引用元】

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%95%E7%AD%92%E4%BF%8A%E5%BD%A6>